

余暇施設開発の実際 29.

正会員 ○三上訓顯*3

スキー場関係者と利用者の余暇活動関心度評価について

稲垣菜月*1

余暇施設 施設運営 余暇活動

西口真也*2

1. はじめに

本稿では、今回調査したスキー場関係者(以後関係者という)側からみた利用者の余暇活動に対する関心度評価と、昨年報告した利用者自身(20歳)に尋ねた余暇活動に対する関心度評価とを比較し、それらの関係性について考察し、余暇施設の整備や運営の知見の一つを得ることが目的である。

そこで関係者について考察した前々報、前報の結果と、利用者について考察した昨年報^{註1)}結果とを比較考察の対象とした。いずれも同一の余暇活動50項目についてアンケート調査で被験者に関心度を尋ねており、解析方法は今年度及び前年度とも同一である。サンプル数は、関係者144、利用者144であった。

2. 出現状況の比較

前述したように関係者の余暇活動50項目における関心度評価の中で、「多いにある」構成比が50%以上が2項目であった。それは関係者としての立場を意識した回答だと判断した。そこで関係者の「少しある」項目で50%以上を超える項目と、利用者評価「多いにあ

る」で50%以上の余暇活動項目を18項目を注出したのが表1である。50%以上の値にはアンダーラインを引いた。

両者で構成比50%以上で出現するのが、01 外食(53.51%:50.09%)、19 パソコン(59.65%:52.08%)、17 ビデオの鑑賞(51.75%:59.03%)、20 音楽鑑賞(50.88%:61.11%)の4項目である。

他方乖離していると判断できるのが31ピクニック等(51.75%:22.92%)、46登山等(51.75%:15.97%)、07スポーツ観戦(50.00%:32.64%)、42サッカー(50.88%:25.09%)、11動物園等(50.88%:20.14%)、10ゲーム等(51.75%:28.47%)、33ジョギング等(56.14%:18.06%)の5項目である。利用者の「少しある」項目と比較しても類似構成比である。それらは従来から行われてきたメジャーな余暇活動だといえる。

さらに両者の「多いにある」項目でスキー(72.81%:15.97%)、スノーボード(65.79%:30.56%)となり乖離の差が大変激しい。スキー関係者の思い込みとは裏腹に、利用者のスキーへの関心は大変低いこと

表1 余暇活動項目出現数構成比別スキー場関係者と利用者

抽出余暇活動項目	スキー場関係者				利用者			
	多いにある	少しある	薄い	全くない	多いにある	少しある	薄い	全くない
43スキー	72.81	18.42	7.02	1.75	15.97	26.39	25.69	31.94
44スノーボード	65.79	24.56	6.14	3.51	30.56	31.25	14.58	23.61
03国内観光旅行	28.95	47.37	17.54	6.14	<u>56.94</u>	29.17	9.03	4.86
30ドライブ	28.95	<u>52.63</u>	14.04	4.39	42.36	27.78	18.75	11.11
31ピクニック・ハイキング・野外散歩	27.19	<u>51.75</u>	14.91	6.14	22.92	36.11	27.78	13.19
01外食	24.56	<u>53.51</u>	20.18	1.75	<u>50.69</u>	39.58	5.56	4.17
46登山・キャンプ	24.56	<u>51.75</u>	17.54	6.14	15.97	18.06	33.33	32.64
19パソコン	22.81	<u>59.65</u>	14.04	3.51	<u>52.08</u>	31.94	11.11	4.86
16テレビの観賞	20.18	<u>57.02</u>	17.54	5.26	45.14	36.81	12.50	5.56
07スポーツ観戦	19.30	<u>50.00</u>	24.56	6.14	32.64	24.31	21.53	21.53
17ビデオの観賞	18.42	<u>51.75</u>	24.56	5.26	<u>59.03</u>	27.78	9.03	4.17
20音楽鑑賞	17.54	<u>50.88</u>	26.32	5.26	<u>61.11</u>	29.86	5.56	3.47
27マンガ・雑誌	12.28	47.37	29.82	10.53	<u>52.08</u>	32.64	7.64	7.64
39ゴルフ・テニス	11.40	47.37	26.32	14.91	18.75	27.78	15.97	37.50
42サッカー・フットサル	10.53	<u>50.88</u>	29.82	8.77	25.69	21.53	24.31	28.47
11動物園・植物園・水族館	9.65	<u>50.88</u>	28.07	11.40	20.14	36.81	26.39	16.67
10ゲームセンター・遊園地	8.77	<u>51.75</u>	26.32	13.16	28.47	31.94	27.78	11.81
33ジョギング・マラソン	7.02	<u>56.14</u>	21.93	14.91	18.06	20.83	31.94	29.17

A Practical Site of Development on the Leisure Facilities Part 29.

About the leisure activity concern degree evaluation of parties concerned in the ski area and the user

MIKAMI Noriaki et al

表2 主成分分析結果に基づくスキー場関係者と利用者

	スキー場関係者(累積寄与率50.30%)	利用者(累積寄与率52.68%)
第1主成分	文化性(寄与率13.89%)	文化性(寄与率13.54%)
カテゴリースコア+側	24絵画・模型制作:0.88,25編物・和裁:0.86	25編物・和裁:0.85,24絵画・模型制作:0.84,
カテゴリースコア-側	3国内旅行:-0.10,	32ボウリング:-0.22,41野球・ソフトボール:-0.16
第2主成分	知的好奇心性(9.02%)	軽スポーツ性(11.30%)
カテゴリースコア+側	3国内旅行:0.75,4海外旅行:0.70,	50水泳:0.70,48サイクリング:0.67
カテゴリースコア-側	40卓球/バドミントン:-0.15,18テレビゲーム:-0.15	2/バー・スナック:-0.08,19パソコン:-0.06
第3主成分	競技性(8.47%)	マニア性(10.10%)
カテゴリースコア+側	41野球ソフトボール:0.79,42サッカー等:0.78,ゴルフ・テニス:0.74,	42サッカー:-0.74,44スノーボード:0.71,9/パチンコ:0.57,08宝くじ:0.56
カテゴリースコア-側	20音楽鑑賞:-0.05,24絵画・模型制作:-0.03	28読書:-0.19,19パソコン:-0.13
第4主成分	娯楽性(8.01%)	レクリエーション性(6.55%)
カテゴリースコア+側	10ゲームセンター・遊園地:0.79,11動物園等:0.75,18テレビゲーム:	3国内旅行:0.70,4海外旅行:0.69,5映画鑑賞:0.51,11外食:0.47
カテゴリースコア-側	46登山・キャンプ:0.007,39ゴルフ・テニス:-0.07	18テレビゲーム:-0.42,14囲碁・将棋:-0.37
第5主成分	アウトドア性(5.98%)	プライベート性(6.17%)
カテゴリースコア+側	43スキー:-0.85,44スノーボード:0.79,46登山キャンプ:0.47,47釣り:	20音楽鑑賞:0.72,16テレビ鑑賞:0.69,17ビデオ鑑賞:0.56,18テレビゲーム:0.56
カテゴリースコア-側	21楽器演奏:-0.12,27マンガ雑誌:-0.10	46登山・キャンプ:-0.12,37柔道・剣道:-0.11
第6主成分	軽易性(4.93%)	施設・設備利用性(5.02%)
カテゴリースコア+側	20音楽鑑賞:0.71,19パソコン:0.60,30ドライブ:0.50,17ビデオ鑑賞:0.	10ゲームセンター・遊園地:0.64,13カラオケ:0.57,2/バー・スナック:0.56
カテゴリースコア-側	38乗馬:-0.24,45アイススケート:-0.11	7スポーツ観戦:-0.21,33ジョギング:-0.18

を示したものと見える。

出現数構成比でみた場合、関係者の利用者像と利用者自身とでは、過半のズレが生じていることがわかる。また本稿の主テーマであつかうスキー・スノーボードは著しく乖離している。

3. 主成分分析による両者の関係

表2は、関係者と利用者の評価結果を主成分分析^{注2)}したもので、どちらも6主成分を抽出している。カテゴリースコアの絶対値の高い余暇活動種目をあげ、それを踏まえて命名をしている。

第1主成分はともに文化性という点では同一主成分だと判断できる。第2主成分以下が、関係者は、知的好奇心性、競技性、娯楽性、アウトドア性、軽易性であるのに対して、利用者は軽スポーツ性、マニア性、レクリエーション性、プライベート性、施設・設備性と異なっている。

異なる主成分をみると、関係者が知的好奇心、競技、娯楽、アウトドアといったオーソドックス或いは本格的な余暇活動を望む利用者像を描いているのに対して、利用者自身は、軽スポーツ、マニア、レクリエーション、プライベートといった比較的個人で楽しむことができ、それでいて軽くできるといった余暇活動スタイルが伺える。特に利用者のプライベート性とかマニア性といった志向性は関係者には、みられない志向性であり、両者の関心度評価の大きな相違点とみられる。

そうした判断からすれば、関係者は、本格的な余暇ができる施設・設備の開発をイメージしがちな傾向が伺える。だが、利用者はそうした本格的性を嫌い、むしろ

ろ軽く、気軽に、そして利用者自身がこだわりをもったりするなどマニアックに取り組める余暇活動を志向していることがわかる。

また関係者ま利用者像は、野球、サッカー等の集団スポーツや、登山やキャンプといった経験と装備を伴い従来からある種目がカテゴリースコアに登場するが、利用者自身は、そうしたヘビーな余暇活動を嫌い、サイクリング、旅行、音楽鑑賞といった主体的に動かない受動的な種目を評価し、両者の性格を分けている。

4. まとめ

関係者からみた利用者像と、利用者自身の余暇活動には共通性もあるが、過半の相違点が出現状況でみられた。また主成分分析比較では、両者間に同一要素もあるが、関係者からみた利用者像が既存種目や本格志向に対して、利用者自身は気軽に軽く、マニアック、プライベートをキーワードとする志向性がある点が相違点である。従来からあるステレオタイプ化された余暇活動ではなく、気軽、マニアック、プライベート志向に込められる施設の企画や開発整備そして運営が必要とされるだろう。

参考文献

注1) 三上訓顯, 大野紘資, 西口真也: 余暇施設開発の実際 24.20代若者の余暇活動意識調査の出現状況について, 日本建築学会大会学術講演集 E-1, pp.335-336, 2010

注2) 西口真也, 三上訓顯, 大野紘資: 余暇施設開発の実際 26.20代若者の余暇活動意識の要因について, 日本建築学会大会学術講演集 E-1, pp.339-340, 2010

※1 名古屋市立大学大学院 博士前期課程
 ※2 名古屋市立大学大学院 研究員
 ※3 名古屋市立大学大学院 教授・博士(デザイン学)

Nagoya City University Graduate School of Master Course.
 Nagoya City University Graduate School
 Nagoya City University Graduate School ,Prof.Nagoya City University Graduate School ,Ph.D.